新たな目標に向かって 紀南の高校生アスリート

国体や全国高校総体（インターハイ）などで盛り上がった2015年の県スポーツ界。紀南からも多くの高校生が全国の舞台に出場し、活躍した。新しい一年は、彼、彼女たちにとってどんな時間になるのか。新たな目標に向かって努力を重ねる姿を取材した。

中陽一

横堀 雅孝 君(18)

陸上競技（やり投げ）

田辺

15年のインターハイで5位、紀の国わかやま国体では4位に入賞するなど、実力は同世代で全国トップレベルだ。

春には大阪教育大学へ進学し、やり投げを続ける。まずは、2年に一度開かれる世界ジュニア陸上競技選手権大会へ日本代表として出場することが目標という。

183㌢、95㌔という大きな体の左膝には、手術の跡が残っている。14年秋に出場した大会の競技中、やりを手放す瞬間に、ひざの皿が真っ二つに割れてしまったのだ。

手術の後、松葉づえなしで歩けるようになったのは12月。リハビリは15年3月まで続いた。つらかったが、全国ランキングで上位にいたこともあって、やり投げへの情熱は変わらなかった。「このままじゃ終われん」。足を動かせない時期は、上半身のトレーニングに時間を割いた。

田辺市中辺路町の家を出るのが午前6時すぎ。帰宅は夜遅くになる日もあった。そんな生活からか、時間の使い方を考えるようになった。モットーは「無駄な練習はしない」。自身は「練習は量だけでなく、質も大事。毎日、課題を持って取り組んでいる」と話す。

今後について、陸上競技部顧問の出羽靖弘教諭（30）は「能力的には日本選手権でも十分活躍できる。これまで通り、ストイックに取り組んでほしい」と期待する。

世界ジュニア大会に出場するには「70㍍台」の記録が必要になりそうで、自己記録（66㍍38）の更新が不可欠になる。「自分にあったフォームを見つけて、会心の投げを出したい」。理想を求める作業は、これからも続く。

大けが乗り越え 理想追う

高田 佑貴 君(16)

体操競技

田辺工業

1年生ながら「紀の国わかやま国体」少年男子の団体メンバーに入り、チームの8位入賞に貢献した。多くの観客が見守る中での演技を「緊張感しかなかった」と振り返る。そんな彼の目標は大きい。

「日本代表として世界大会に出て有名になりたい」

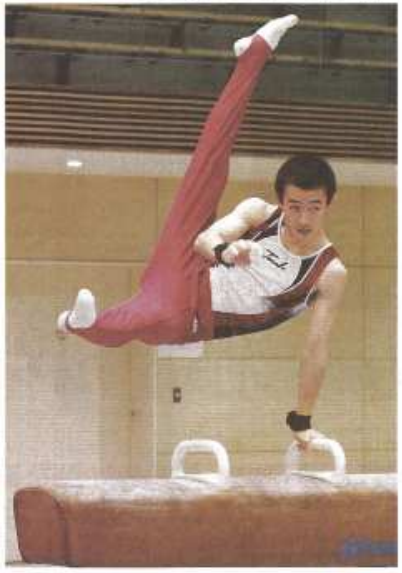
その思いをより強くしたきっかけの一つは、同世代の日本代表合宿（2015年10月、東京都）に参加したこと。国内トップの選手たちは、技術だけでなく、翌日にしっかり動けるようにと食事など体操以外のことにも気を配っていた。「思った以上に自分と差があった」。

高くて、キレがあって、手足の先までしっかり伸びている。目指すのは、そんな体操だ。

「高校に入ってからは満足できる演技がない」と本人はいうが、指導する体操競技顧問の柴田達也教諭（50）は「まだまだ未完成で荒削りだが、のびしろは大きい」と期待する。30年近い指導歴の中でもあまりいなかったタイプで「彼がどう伸びるかは、私自身の挑戦でもある」という。

本人は、日々の練習で「失敗したら終わり」と自分に言い聞かせるという。試合のたびに緊張してしまうから、背段から追い込んでおこうという狙いだ。

努力を結果につなげられるかどうか。この一年が分岐点になるかもしれない。



いつか日本代表に

陸上競技（長距離）

神島

橋本 奈津 さん(18)
山本 明日香 さん(18)
木村 仁美 さん(18)

3人それぞれの道へ

小学生のころからお互いを知る間柄だった3人は、やがて同じ高校へ進学。ともに競い、支え合って高校生の長距離種目で「神島」の名を全国へと押し上げた。

春には、橋本さんは京都産業大学、山本さんは大阪芸術大学、木村さんは日本大学への進学が決まっている。迷いはあったが、競技を続けると決心した。全日本大学女子駅伝や日本学生陸上競技対校選手権という新たな目標に向け、それぞれ新しい場所で走り始める。

3人はともに「礼儀を大切にして、周囲への感謝を忘れず、応援してもらえる選手になりたい」と言う。どれも、高校生活で得た教訓だ。

15年12月20日に京都市で開かれた全国高校駅伝では、山本さんが1区、橋本さんは2区、木村さんは最終5区を走った。チームは前年より順位を三つ上げた。

今月17日に京都市である都道府県対抗駅伝大会の県女子チーム（13人）にも、3人は入っている。

△（右から）橋本奈津さん、木村仁美さん、山本明日香さん

陸上競技部顧問の長山丞教諭（34）は「3人は選手として、人間として少しずつ力をつけてきた。高校卒業と同時に競技を終える生徒が少なくない中で、後輩やこれから競技を始めようとしている子どもたちの目安になってくれれば」と話している。

★ジュニア育成の今後

5人のように全国大会クラスの舞台で活躍できる選手を、これからどう育てていくのか。国体開催で盛り上がった機運をきっかけに、県は腰を据えて取り組む方針だ。

公式記録ではないが、紀の国わかやま国体各競技での少年種目だけの成績を比べると、県の順位は5位。県外出身の競技者も県代表として出場できる成年種目と違い、実力がそのまま出る中で好成績を残せたのは、中心となった高校2、3年生を「ターゲットエージ」として、数年前から強化してきたことも大きく影響している。

県は「取り組みを定着させることが必要」として、ノウハウを生かして選手を発掘し育成、強化するというシステムをつくる。

優れた指導者を生むための取り組みも検討している。現在、指導に当たる人たちのレベルを上げるだけでなく、20、30代といった若い世代に次の世代で活躍してもらえるようにすることも考えている。